夕刊

九月十四日發行

定價（郵税共）一ヶ月金六拾五錢　一部金五錢

廣告料金　一行金九拾錢　同金六拾錢　（但所謂定型一行五號十字詰）

編輯人兼發行人　磐城新聞社　木村甲子郎

印刷人兼發行所　磐城新聞社

登録番號（ライノタイプ）第二五八四番

電話五八番

（日曜祭日翌日休刊）

金成通氏を論ず

植田町　風流生

二の數が幾何級數的に十回進歩すると一千〇二十四と云ふ大きな數になるが之れと同じく二の數が算術級數的に十回進歩したのでは僅か二十にしか達しない。同じ十回の進歩であつてもれと同時に此の事業發達の前者は後者の五十一倍強と云ふ率を示してゐるのである。と云ふ

伊達正宗、太閤の招ぎに應じて登城した時、遠來の客の馳走にもと太閤は正宗を陣後の山に案内し、戰況をば視察せしめた『汝、奥州の小せり合ひには慣れたれども大合戰の手あいは知らぬであらう。此の陣は斯々のわけ、あの陣はこれ〳〵の次第である』と陣容を隈なく説明し終るや正宗に已れの大刀を持たせた儘後をも見ずに悠々と引上げ正宗を蓋世とも思はぬ風情であつたと云ふ。此の偉大の太閤があれだけの大事業を殘すに至つた迄には果してどんな忍苦の數々を嘗めて來たかは今更筆者がこゝに書く迄も無いであらう一農夫の子として生を享けた金成氏が今日上院議員としての榮冠を冠ち得た迄を考へて見る時それは慥かに太閤のあの幾何級數的進歩と酷似してゐる點がないではない事を思はねばならぬ氏が今日迄踏み來つた閲暦の次第に就ては既に報じられてゐる事だけに今更繰返す迄もないであらう。氏が植電の社長として地方産業の爲に多大の功績を樹て而も其の餘力を以てして地方子弟の教養に乃至社會公共的事業に極力盡瘁して寧日なきあの努力の跡は餘りにも世人に知り盡されては居語るものであり、氏の精神の豊かさを物語るものでなることである、一つの營利事業は慥かに多數人類の爲となつて福祉を與へるがそれと同時に此の事業發達の所以は取りも直さず之等多數人類からの個々の恩惠に依てこそ成るのであること

更に自已を知る事に依つて事業の性質をも知り今日の如くに至つたのではないかと思ふ。

氏の恁ふした幾多の社會事業は氏の識見の大部分を物語るものであり、氏の精神の豊かさを物語るものでなかんであらう。

（つゞく）

時代警句

○人は智識にのみ由りて生活するものにあらず……（ゴルキー）

精神を修養して道德に反せず、崇高な理想を實現せしむるに勉むるを得て茲に偉大なる品性は完成の域に達するのである……

信濃の旅

島田忠夫

○野尻湖辨天島

○いにしへゆたたふる湖かしづかなる夕べとなれば水浴みにくだる

○しづけさや湖の中なる浮島の木ぬれほの白きがまぐみの花

○湖は暮れ入りにつつ夕靜けし夕餉にゆくと舟漕ぎ出づる

○湖のあかりさびしも天なるや妙高の山くれのこる見ゆ

○うみの上の社にともす灯は暗し萬葉集を講じわがをり

○時鳥こゆ鳴きわたれみづうみの上は夜ふけて月明りしつ

潮聲句會　第四十七集

夏の草　客

夏草に風冷え々々と暮れにけり　眞砂常

日に晒らす蠶莚のあり夏の草　松堂

夏草のさわめき立ちぬ夕嵐　武門

驟雨一過夏草原の清々し　芳月

覓走る水の細さや夏の草　晩霞

三光逆列

巨石見んと夏草深く分け入れり　蘭外

屋根ばかり見ゆる家あり夏の草　石城

夏草の熱砂にまみれ青きかな　竹羊

正しき生活

磯上六花

靜かに体まう

一日の勞働で疲れ切つた身體をこのベットに投げ出して

靜かに考へよう——

今日の邪々の行動を

冷靜に思ひ浮べて

靜かに寝よう——

寒でる虫の小夜曲を

しつかりハートにだき締めて

朗かに來る日の意義ある

活動の爲に

しばらく——

この良體を神にゆだねよう。

拈華微笑

◇幾月振りかで逝炭量增加。戀人に逢つた心地

◇磐中一學期來の家事都合退學生十九名。世相の反映涙が滲む

◇コマ市號惡氣流の爲壯圖挫折す（昭和五）△神谷ふ聲にて井上縣議候補演說會（同六）

◇名月や九尺の床の鬼芒　紫明亭

◇にぎやかに神田祭の幕あけば　いつしか秋も忘られしかな　吉井勇

◇焼餅をヤカンで釜屋に納入させれば良かつたに　セウケエなんて

◇今更間に合はぬ水道竣功式記念品購入の手違ひ

◇萬頃の美田、淡黄一色。實る秋）の氣分漸く出づ

○……○

社會の今日

○

ケイ氏の恩惠

新事新報記者　齋藤昌武

◇新聞人を志すまで◇（1）

磐城中學を卒業したのが丁度昭和二年の春のことだつた、中學を出たばかりのほや〳〵が將來自分の進むべき進路を決定し多雜多難な活社會へ飛び出すことを確信するのは勿論あらゆる意味に於て困難でもあり希望と青春の誇に燃え水産科を志望して北大の豫科を受けた、自分は見事失敗した、その中學卒業當時の一年自分は、たゞくだらなく遊び暮すことを苦にして東へ西へかけ廻つた、當時在平新聞の記者などは、とりどめない、種拾ひと考へられてつまらない者とされてゐた、K氏は當時I新聞の支局長として縱横の筆をふるつてゐた、自分もふとした緣でこの支局の一員と成つてまあ喜びに滿ちた生活戰線へ特にニュース取りをする好機に接し警察、裁判各方面へとかけ出してはその一日〳〵の樂みとしてゐたのだつた。

その途上小名濱校の代用教員に雇はれたりして教育人としての幾分の體驗も獲得し得たのであつた。そしてその一ヶ年短くはあつたが有効適切に邁進した。その一進路のプロセスに於て自分が描き出した社會への期待は勿論新聞人として少くとも派立に立ちたいと云ふ先輩各名士の書文を繕き我ものの如く耽讀し翌三年早稲田の政治科に入學した。

學校新聞が思想反目の圓に介在して何もかも、むづかしい論難の中に在學早稲田四年の生活は『新聞』『ニュース』まるでかたまつたそのものの如く毎日々々新聞に關する講義研究上難聞くことをこの上ない偉大なる刺戟と考へてゐた。

講談　お蘭陀お蝶

（132）

渡邊默禪作

布施長春畫

『おゝ寒い、今夜の風は、また格別だぜ、ハクション、とう〳〵風邪を引きやがつたか、エー火の用心』

折しも町角から夜廻りの番太郎が來た。手拭をひよつとこ冠りの尻端折繼ぎはぎの古股引に冷飯草履を突かけて、弓張提灯を腰に挿したなりに、水洟をこすりながら拍子木をかち〳〵と叩く

『いやな晩だな、火事だけはやつとこせいと靜まつたが、一揆の討ち洩らされがまだそこいらにウロ〳〵してるちうことで御役人衆が嚴く廻つてござるだ、其處で叩斬られたの、此處で突き殺されたのと怖ねえ噂ばかり聞いたばかりでハアそつとする、エ——火の用心……こげえな晩は、ゆつくら休んで家に寢てゐてえが、町内へ對して爾もなんてる、何だ何だ』

と二人は急いで天水橋の陰へかくれようとした、が遲かつた、逸早くも其の姿を見た番太郎は、ぎよつとして後へよろ〳〵と尻込みながら

『ど、ど、泥棒だ〳〵』

と絶叫して拍子木を亂調に叩き鳴らした

『それつ！』

と、とつと躍り出した二人が拔く手も見せずズシリと、取るに足らぬ一二の小吏を的に困難な仕事を繰返して尚、爲すあるの身を危險界に投ずるの策である、げ出した提灯からパツと燈が立つた

忽ちにして萬籟寂然

途端に三好屋の裏のくゞり門がする〳〵と開いた。ぬつと顏を出したのは隱居の摸樣である

『やつ！貴君はつ！』

月明りに其の顏を見上げてびつくり

『シッ』

一人は手を振つて制した

そして後を壓くと番太郎を斬り倒した一人が血を拭つがらに袂を別つた

『きやつ！』

と悲鳴を揚げて仰向さまに顚がつた肩先に血煙、投が立つた

聽き入れぬので止むなく自分もそれに從ひ、父の犧牲となつて生死を共にすると止んぬと長嘆したのである

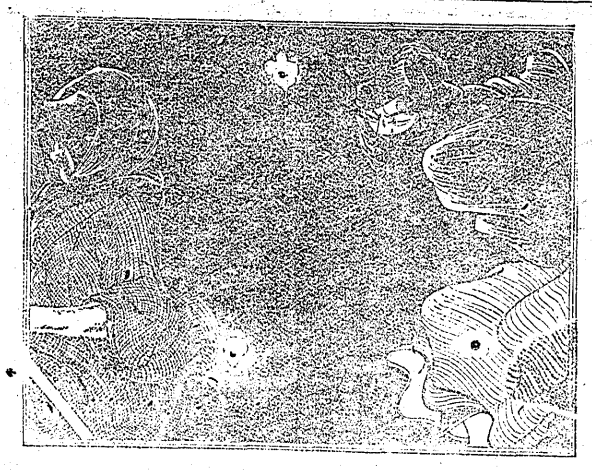
隨行者は自由行動、おのが自由に行きたい所へ行くことになつた、瀨田、渡邊近藤の三人は河内へ、大井正太郎外一名は自宅へ戻つて割腹する決心、主從涙な

くの工夫を運し、討ち洩らした奸賊共の首を刎ねるのが我々の本分であると說いた、是は徒らに名節に拘泥し、取るに足らぬ一二の小吏を的に困難な仕事を繰返して尚、爲すあるの身を危險界に投ずるの策である、げ出した提灯からパツと燈が立つた

忽ちにして萬籟寂然

途端に三好屋の裏のくゞり門がする〳〵と開いた。ぬつと顏を出したのは隱居とにしたが心の中では我事止んぬと長嘆したのである

隨行者は自由行動、おのが自由に行きたい所へ行くことになつた、瀨田、渡邊近藤の三人は河内へ、大井正太郎外一名は自宅へ戻つて割腹する決心、主從涙な



靜かに寄つて來た

三人は無言で頷き合つたけ捜索嚴しい敵の目を忍んで空には霜の樣な一痕の月魄で丑の刻とも覺しい時分に門を叩いたのは大鹽と格之助であつた、

父子二人は戰破れて衆を解散してから三四人の從者とひそかに八軒屋まで落ちのび、舟の中でいろ〳〵前途のことを相談すると瀨田濟之助、渡邊良左衛門、近藤梶五郎等は河内へ奔つて再擧を謀らうと云ひ、格之助は舟を艤して九州へ渡り便宜の地に身を隱して他日雄飛の機會を待とうと主張した、けれども平八郎は何の謀をも採らず遠くへ逃走して身を完うするは恥を知る武士の爲すべき所業ではない、寧ろ大阪に踏み止まつて飽く迄も初一念を貫

大鹽父子は船を靱橋へ着け搜索嚴しい敵の目を忍んで丑の刻とも覺しい時分に掛町の三好屋を訪ねたのであつた。

ラヂオ

……十五日……〔木曜〕……

仙臺　JOHK

△前六、〇〇A　ラヂオ體操

△六、三〇A　家庭教育講座（青年の心理と性教育）京都帝國大學教授文學博士野上俊雄

△七、〇〇A　エスペラント講座　八木日出雄

△九、〇〇A　氣象

△九、一〇A　料理献立（バター焼菓子）中村光三

日用品値段

△一〇、三〇A　家庭講座（ワイシャツの作り方）土屋許子

△正午A　時報　氣象

△後〇、〇五　落語（派手彦）柳亭魚樂

△〇、四〇A　ニュース

△二、〇〇A　講演（日本精神に就て）高須芳次郎

△三、四〇A　氣象

△四、〇〇A　ニュース

△六、〇〇（子供の時間）話（お月様に代つて）鈴木健治

△六、二〇A　コドモの新聞　村岡花子

△六、二五　カレント、トピックス　ハロルド、バーマー

△六、三〇　趣味講演（川柳）漫畫…月も歩く）小林不浪人

△七、〇〇A　ニュース　氣象　生蘭相場（仲秋名月の夕）

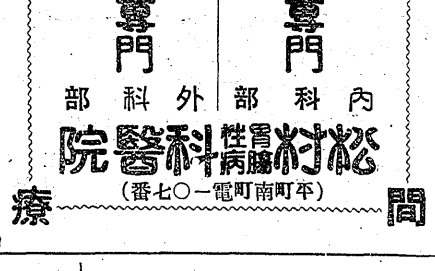
△七、三〇A　短歌會（一、觀月短歌會）選者…與謝野晶子　俳句會（二、觀月俳句會）選者…高濱虛子（東京向島百花園より中繼）

△八、三〇B　マイクロフォンロケーション講演（嵯峨野より）阪倉篤太郎（洛西大覺寺大澤池畔より中繼）

△九、〇〇B　月に奏でる（一、尺八…想夫戀　二、箏二重奏）

△九、三〇A　時報

△九、三〇A　滿洲より（滿洲事變直後の奉天）立法院長趙欣伯　ニュース　氣象　生蘭相場

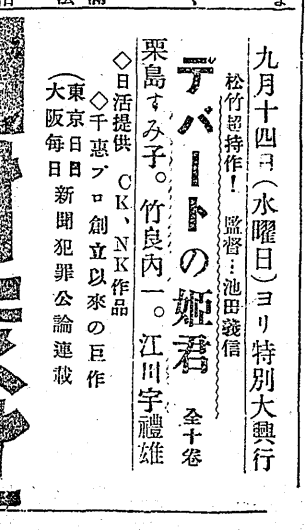


セダン揃ひで！
貸切專門の！
昭和タクシーへ
三四三番

高久病院
院長　高久忠
平町田町電五一三

吉田眼科病院

秋の帽子と毛布
旅行用トランク・ステツキ
ハンドバツク・お化粧用品
秋向お子様の服裝用品種々豊富に取揃へました
廉價な優秀品
正　中野洋品店
平二町目・電五十三番



九月十四日（水曜日）ヨリ特別大興行
松竹謹持作！　監督…池田義信
アバートの姫君　全十卷
栗島すみ子。竹良内一。江川宇禮雄
◇日活提供　CK、NK作品
◇千恵ブロ創立以來の巨作
（東京日日新聞犯罪公論連載
大阪毎日新聞犯罪公論連載）

片岡千恵藏。山田五十鈴。衣笠諄子
原作…村松梢風　監督…伊丹萬作
仙臺放送局（HK）より擔當解說者…石井孝氏が放送局推薦により放送せる責任と自信ある近來の大名畫である！全二十卷　同時上映
石井孝獨演
十五日……八幡宮大祭
十七日……土曜日
十八日……日曜日
晝夜二回公開
料金…普通二〇
映畫長尺、正七時映寫
ヒルの部十二時ヨリ
日活
松竹
平館
電466

難波醫院
一内
般科
醫學博士　難波睦
平町大町新川端（電話五〇二番）

夏期中臨時大特賣トシテ御願申シマシタ。石炭モ御蔭樣デ全部ヲ賣リ盡シマシタ就キマシテハ從來ノ石炭ヲ御願ヒスル事ニナリマシタカラ不相變御引立ノ程偏ニ御願申シマス。
◎正味十貫目　金三十錢
御注文ハ
電話三七番へ
㋟阿部石炭商店
平停車場前
配達ハ一俵ヨリ致シマス。

産婦人科
花柳病科
井阪醫院
平町田町（元合津將院跡）
電話五五九番
午前宅診
午後往診
入院應需

物質と美人が豊富な奉天へ忍び寄る彼等

秋風に葉音かそけき高粱の蔭から

内郷村出身　志賀武弘君（寄）

燒きつく様な〜〜過ぎ秋風そよ吹く大陸の暑さも頃となりました、陣中とは申しながら意外なる御無沙汰を致し誠に申譯御座いませんが、山口先生が北大營の御見學を終りハルビン方面に御旅行間もなく、北滿一帯に暴風雨襲ひ來り非常なる混亂に陷りました、特にハルビン等は筆舌に盡されざる狀態となり御旅行の先生を吾等一同蔭乍ら御無事なるやうに御祈りして居りました處前の小利に向後を考へず掠先生には三十餘日の朝無事奪、暴行を樂しむ御視察を終り御歸郷なされたとの事をお知せに接し吾等一同非常に喜んで居ります。

吾等一同も元〜〜務に服し氣旺盛にて軍〜〜て居ります、去る二十八日夜匪賊の奉天襲撃の眞相を概略申上ます、二十八日は朝から降雨ありて不快の一日を經過し夜に入りました處、奉天東南方遠く盛なる銃聲を聞き次で十一時半頃に至り當時城内警備の任にありし第〇〇隊より匪賊三、四百東北の操業伸展から幾分の好飛行場（東兵工廠前）を擊滅轉を豫想されたが幸にして交戰中との至急報に接し待期の吾等は直に之を擊退すべく出動せるに彼等は逸早く逃走し其の片影だになく翌朝九時一同無事歸隊致しました、

襲撃し來りし〜〜名位の如匪賊は三四百〜〜くにて其の一部は奉天城南方附近に出現し大部は東南方兵工廠東飛行場を襲撃致しました當時飛行場の警備を擔任しありし第〇〇隊の下士官以下〇名直に之に應戰致しました、けれども恰も當夜は咫尺を辨ぜざる暗夜のことと前後の透視もならず其内別隊のもの格納庫の一棟に放火し押收せる破損飛行機數臺燒失致しました、此の時第〇〇隊特務曹長小關清殿（相馬出身）

連絡應援等に彈に中り奔走中不幸敵〜〜名撃の戰れが助成遂行に邁進すべき

燒きつく様な〜〜過ぎ秋風死を遂げられました。尚は大陸の暑さも頃となりました、陣中とは申しながら意外なる御無沙汰を致し誠に申譯御座いませんが、山口先生が北大營の御見學を終りハルビン方面に長きは一丈五六尺に及び一御旅行間もなく、北滿一帯に暴風雨襲ひ來り非常なる混亂に陷りました、特にハルビン等は筆舌に盡されざる狀態となり御旅行の先生を吾等一同蔭乍ら御無事なるやうに御祈りして居ります、去る二十八日夜匪賊の奉天襲撃の眞相を概略申上ます、二十八日は朝から降雨ありて不快の一日を經過し夜に入りました處、奉天東南方遠く盛なる銃聲を聞き次で十一時半頃に至り當てゐた常磐炭界は最近漸く時城内警備の任にありし第需要季に入つたのと製糸會〇〇隊より匪賊三、四百東北の操業伸展から幾分の好飛行場（東兵工廠前）を擊滅轉を豫想されたが幸にして交戰中との至急報に接し待期の吾等は直に之を擊退すべく出動せるに彼等は逸早く逃走し其の片影だになく翌朝九時一同無事歸隊致しました、

襲撃し來りし〜〜名位の如匪賊は三四百〜〜くにて其の一部は奉天城南方附近に出現し大部は東南方兵工廠東飛行場を襲撃致しました當時飛行場の警備を擔任しありし第〇〇隊の下士官以下〇名直に之に應戰致しました、けれども恰も當夜は咫尺を辨ぜざる暗夜のことと前後の透視もならず其内別隊のもの格納庫の一棟に放火し押收せる破損飛行やはり武裝的の集團移民が機數臺燒失致しました、此の時第〇〇隊特務曹長小關清殿（相馬出身）

連絡應援等に彈に中り奔走中不幸敵〜〜名撃の戰れが助成遂行に邁進すべき

滿洲行

藤田中尉

第七十三信

財政部に大杉氏の抱負を聽く（續）

◇移民の形式　としては將來は兎に角目下の情勢から考へて放火し押收せる破損飛行やはり武裝的の集團移民が最も安全で効果的であらうこの觀點からするなら差し當り在郷軍人が適任だ、政府は速かに且つ積極的に